

「檸檬」を読んで

須藤 良子

小説『檸檬』はこのようない節で始まる。

「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。」

物語の主人公は鬱屈しているようだ。だが一個の檸檬と出会い、束の間の蘇生を体験する。その時の感動を著者はこう表現した。

「いったい私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈の詰まった紡錘形の格好も。(略)その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかった。(略)私は何度も何度もその香りを鼻に持っていつては嗅いでみた。その産地だというカリフォルニアが想像に上って来る。」

美しい文章だと思った。檸檬の生き生きとした姿、触感に歓喜する主人公の心の在り様が興味深い。ありふれた檸檬を、こんなにも魅惑的に描いた梶井基次郎の思惑。それは空想の中に〈私〉という主人公を仕立て、自らの文学や芸術への思いを体現する事であった。

〈私〉は肺病と借金を抱えていて神経衰弱でもある。けれども、

そうした落魄の身よりもいけないのは不吉な塊だと考えた。以前、関心を持っていた「美しい音楽」や、「美しい詩」にも癒されず、あれほど好きだった書店の丸善も、今は重苦しい場所にすぎない。そんな〈私〉は京都の街から街、裏通りを浮浪し続け、目に映る風景に不可解な感性を見せる。「崩れている土塀」、「転がしてあるがらくた」等の何気ない風景を、「みすぼらしくて美しい」と感じ惹きつけられるのだ。

又、音楽や詩と同様に、丸善ではフランスの画家・アングルの画集に魅了され、琥珀色や翡翠色の香水瓶を眺めるのが大好きだった。芸術への充足感に心を躍らせていた様子が窺える。だがなぜか、そうした文化的な様相に至上の価値を持っていた美感は、転じてそれらに喪失感を持つてしまう。単に「美しいもの」だけではなく、それに「みすぼらしさ」の伴いを求めたのだ。その意味合いに解釈を深めてみると、落ちぶれた〈私〉に何かしら共通して心に馴染んだと思われる。

その様な〈私〉は、出来れば京都から逃げ出したいと思っていて、誰も知らない街の旅館での安静を望み、空想でその錯覚を成功させた。そして現実の自分を見失うのを楽しんだのである。異

郷への逃避行。その願望から読み取れるのは、理想と現実との乖離である。否定はしているが、当時、死病であった肺の病と貧乏という事実、前途への不安や焦燥に駆られていた事は否めない。そういう現実には密着しているのが、文学や芸術への価値観の変化である。そうした現実の桎梏への堪え難さが、〈私〉の心に衰弱を齎したとすれば、空想で安楽を欲した事に同情の念が起こる。

さて、〈私〉にとっては丸善も伝統芸術の中心地である京都も、既存の文化の象徴であり、訣別したい存在であった。そんな胸中を表出した物語の最後の一行が印象的だ。

「そして私は活動写真の看板が奇体な趣きで街を彩っている京極を下がって行った。」

通俗的な風景に背を向け街を立ち去ったのは、新たな創作意欲に燃えつつ、本当の自分が見えたからだと思う。その本望に読解を重ねたいので、話を冒頭に戻したい。檸檬を手に入れた〈私〉はそれを握った瞬間からあんなに執拗かった憂鬱から解放され、「単純な冷覚や味覚や視覚が」心の迷いを取り去ったのだ。ずっと昔からこればかり探していたと言いたくなるほど自分にしっくりして、「つまりはこの重さなんだな」という思いに至り、この上

ない幸福感に浸る。〈私〉が実感した「この重さ」とはつまり、この文章の初めに紹介した檸檬の描写、そのものなのだ。生命力の溢れた鮮やかな檸檬のような文学。それが〈私〉の求める新たな芸術観だと思った。

幸福感に心を充たされたまま檸檬を手にし、あんなに避けていた丸善に入ってみたのは、まだ至福感を保持していたからだろう。だが、又もや挫折感に襲われる。そこで不意に起こった企み。無意識に積み重ねた本の頂上に、檸檬を爆弾に見立てて置いたのだ。そして第二のアイディア。丸善を爆破する想像は「美術の柵を中心として」という文言で、さらなる意思表示を感じた。実存の美への気付きで、画集の美が味気無いものになったと思う。

檸檬の香気、生活の匂いがする風景などの事物に癒され、〈私〉の高ぶった精神がみずみずしい感性を取り戻したのだ。そう考えると、丸善での行為は必然的であり、これからの〈私〉の芸術観を示したに相違ない。

著者の感性のみを追いかけてきた『檸檬』。その鋭敏な感受性に圧倒されたが、それがこの物語を駆動している力であり、美妙的な文章を生み出していると思った。紐解きの暗い雰囲気から始まり、

檸檬を要点に〈私〉の気持ちが進んでいく爽やかな空想の物語。

「心って奴は不可思議だ」と呟く〈私〉に、読み手はこう語り掛けたい。「不安も夢も、貴方の心がつくり出したのですね」と。